



Thank you for your request!!!

魔法少女トト 5周年企画

あかざ
2019.7.1

<http://cherrywind.ciao.jp/mc/>
twitter @mahoubiscuit

Toshiro Hjikata Dream Novel

<http://cherrywind.ciao.jp/mc/>
twitter @mahoubiscuit

「そんなにしんどいのか？」
「土方さんのがせいですよ」
「お前だつてノリノリだつたろうが」
　果物ナイフを器用に使つて桃の皮を剥く。骨張つて日に焼けた土方さんの指が、よく熟して柔らかな果実を握つて、いるのはそれだけで官能的だ。強く握り込みすぎているのか、桃の肌に指が食い込んでいる。
　と、ぶしゅっと果汁が吹き出して私の顔を濡らした。
「あ、悪い」
　土方さんは浴衣の袖口で拭つてくれるので、果汁のべたべたはそう簡単には取れない。濡れた唇を舐めると甘くさわやかな味がした。
「なんでお前はそうやつて複雑に考えたがるんだか。1日中うじうじ悩んでせつかくの休み潰しちまうなんて、もつたいねえと思わねえの？」

「どうしでも考へちゃうんだから仕方ないでしょ」
「これでも食つて忘れろよ」
　言うなり、土方さんは有無を言わさず私の口に桃の欠片を押し込んできた。それは私の小さな口には収まりきらないほど大きくて、思わず咳き込んでしまう。けれど一度口に入れたものを吐き出すこともできなくて、嘔吐きそうになるのをなんとかこらえて、無理矢理飲み下した。口の端からこぼれた果汁が喉元まで垂れた。
「何するんですか……？」
　涙目になつたまま見上げると、土方さんは瞳孔の開いた目で私を見下ろしながら、果汁に濡れた指をペロリと舐めた。
「どうせ江戸に戻ればすぐに忙しくなるんだし、そしたらいいつしょにいられる時間なんか全然無くなるんだ。せめて今くらい好きにさせろよ」
「好きにの、意味が分からないんですが」

「食つたら元気出ただろ?」
「……疲れてるの。もう少し休ませて」
「もう少しつてどんくらい?」
「土方さんつてば」
土方さんはいつになく愉快そうに笑つた。
その満ち足りた笑顔を見ると、土方さんがこのくだらないことを心底楽しんでいることが手に取るように分かる。
私はうんと力を入れて上体を起こすと、土方さんの手から残りの桃を奪い取つてその口に押し込んでやつた。よく熟れた桃はほんの少し力を入れただけで甘い蜜をたっぷり滴らせず、土方さんの口どころか、はだけた胸や浴衣まで濡らしてしまふ。
「何すんだよ、べたべたになつちまつただろうが」
「これでおあいこでしょ」
土方さんは不快そうに濡れた口元を拭う。もちろん、それ

だけではべたつく果汁は拭きとれない。
「しようがねえな、風呂で流してくるか」
「なら私も。もう体中べたべた」
「動けるのか?」
「だめ。連れてってくださいな」
赤ん坊のように甘えて両腕を伸ばすと、土方さんはにやりと笑い軽々と私を持ち上げて、そのまま部屋付きの内湯に連れて行つてくれた。
わけもなく笑えてくるのは、ばかなことをしている自覚があるからだ。けれど、誰に迷惑をかけるわけでもないし、こんなことができるるのは今この場所でだけだと分かつてゐる。
永遠には続かないからこそ、今この瞬間が他の何にも代えがたく愛おしいのだ。